様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 １７ 日現在

機関番号：３５４０８
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2013～2015
課題番号：２５７７００５２

研究課題名（和文）中国明末期書画論の基礎的研究―董其昌理論の変遷を基軸として―

研究課題名（英文）Basic Research on Theory of Chinese Calligraphy and Painting in the Late Ming Dynasty: Focus on the Transition of Dong Qichang's Theory

研究代表者
尾川　明穂（OGAWA, Akiho）

安田女子大学・文学部・助教

研究者番号：２０６３０９０８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、中国明末期の書画論を渉猟することにより、いわゆる南北宗論や書の時代性説などで著名な董其昌（1555-1636）の理論を相対化しつつ、特に当時の書法理論がいかに展開したかを探ったものである。
董其昌の理論は、自他の書画収蔵や法帖刊行事業により、擬古主義から人品重視、そして古法脱去の標榜へと変化したと考えられる。しかし、基本的には、波発のようなうねる筆線を伴う作風を重視したものであった。この傾向は、米ﾌﾂに偽托された出自不明の書跡が出現したことや、豊坊『筆訣』観峰館蔵本における隷楷二体を明確に区分しない書体観とも通じていよう。明末の理論は、清初以降にない如上の志向を持っていたと考えられる。

研究成果の概要（英文）：This study illustrates the development of Dong Qichang (1555-1636) 's calligraphy theory, through an analysis of publications by himself and others in the late Ming dynasty.
In the course of collecting works produced by others and his own, and publishing copybook printed from the works of old masters, the theory of Dong Qichang had gradually changed, though he consistently paid attention to the expressive brush force, characteristic in the clerical script. This attitude, which focused on the expressive brush force of works whether it was written in the clerical script or in the regular script, can be seen also in his remark referring to the works faking Mi Fu, and in the "Bijue" by Feng Fang, housed in the Kampo Museum. This particular point of view disappeared after the early Qing dynasty, thus emphasizing its significance.

研究分野：美術史

キーワード：董其昌　書論　画論　明末　題跋　法帖　顔真卿　楊凝式

１．研究開始当初の背景

(1) 本研究に関連する研究動向

董其昌（明・嘉靖 34-崇禎９、1555-1636）は、明代書画家の中では最も注目されていると見られる人物であり、これまでも「南宗北斗―董其昌書画学術研討会」（マカオ、2005）など複数の展覧会・研究集会が開催されている。主に、彼の書画収蔵家、鑑定家、実作者としての面が称賛されるほか、その書画論に対しても以下の内容が注目されてきた。

① 晋・唐・宋各王朝の書法を簡潔に評した「書の時代性説」や、歴代画人を二派に分類する「南北二宗論」の提唱（現今の中国絵画・書法史研究においても強く関心が持たれている）

② 董の自叙に記された書画学習の履歴と、それらから窺える書画に関する思想

③ 陽明学左派や禅宗の思想に通じたことと、それらを交えた書画・詩文の理論構築

董の書画論は、子孫・後人の編纂による『容台別集』（1630 初刻）・『画禅室随筆』（1678 以前初刻か）に多く確認でき、これらと後世の評価を交えて上記の考察がなされているようである。

(2) 問題の所在

しかし、報告者は、『董其昌書法理論の変遷』（博士論文、筑波大学、2011）執筆の際、従来の董其昌書論研究において看過されてきた以下の問題点に着目した。

① 考察のために引用される上掲『容台別集』『画禅室随筆』は、いずれも彼の子孫や後世の人物により編纂されており、董の真意をどれほど伝えるものかわからない点（黄惇「関于董其昌書論資料来源的審定」〔『芸苑』総第 40 期、1989〕が指摘しているが、ほとんど顧みられていない）。

② 董其昌の記述を扱う際に執筆年代が考慮されておらず、董其昌自身の書法観（書法に関する好尚・志向も含む）に変遷や、時期ごとの特徴があった可能性が考えられていない点（管見では唯一、薛永年「謝朝華而啓夕秀―董其昌的書法理論与実践」〔上海書画出版社編『董其昌研究文集』同社、1998〕が考察しているが、現在それを承けた説は見られない）。

(3) 予備的検討

上記の問題に鑑み、題跋など多く残る董の自筆資料を収集し、その主張を時系列に従って確認したところ、以下の結論に至った。

① 董の書画思想には自叙に窺えない変遷が見られ、その変遷の契機として、董源画「富春山居図」などの収蔵状況や、他人の出版事業（王肯堂〔1549-1613〕の法帖『鬱岡斎墨妙』刊行）への対抗が想定される。

② 主要所説である「南北宗論」「書の時代性説」がそれぞれ 45 歳、57 歳の前後数年間のみ述べられたと推測され、かつ同時代人の書論にも類似説が見られることから、董独自の知見でない可能性がある。

③ 当時の思想から影響を受けたとされる説についても、董以前に類似例が多く確認できた。

以上の点から、明末の書画思想を考察するうえでは、伝存量の多い董の書画論を基軸としつつも、当時の他の書画思想や、鑑賞・出版活動の動向に注目するべきとの思いを強くした。

２．研究の目的

本研究では、董の思想を相対化するべく、閑却されてきた他の明末書画思想の実相解明を目指した。主に、①董の最終的な知見に至るまでの変遷とその契機を示すこと、②未公刊資料などから、同時代人の書画思想や、鑑賞・出版活動が窺える記録を博捜、整理考察することの２つを柱として行った。

収蔵・出版活動や董其昌以前の書論が、董の書法観に影響を与えた可能性があるという如上の結果に鑑み、本研究期間内には、概ね嘉靖年間から明清鼎革までの 1522～1644 年を対象として、書画論などの書画関連記述の収集・考察を行うことを目指した。明末期における鑑賞・出版といった活動の実際とも照らして、董以外に行われた多様な思想・活動の展開も中国書画史のなかに位置づけるべく努めた。

３．研究の方法

(1) 対象とする資料

収集対象の資料は、主に国内に所蔵のある書画論（豊坊「筆訣」等）のほか、上述の鑑賞等の活動が窺える日記類（李日華『味水軒日記』等）、画譜・法帖（朱文治輯『文字会宝』、「西園雅集図記」などの米芾専帖等）を予定して進めた。

(2) 対象とする事象

収集後は、主に以下の点から考察を行った。

① 古典との対峙に関する思想。従来、擬古・反擬古の違いが注目されてきたが、そのなかでも守るべき規範の範囲などに着目する。例えば、擬古・反擬古を訴える際に頻出する「法」語などが、肯定的または否定的のいずれに捉えられていたか、また時期により意味合いを異にしていないかなどである。

② 書画の風格に関する好尚。例えば、明末においては特に書体や王羲之（303?-361?）書法への言及が多く見られるが、董はほとんど触れていない。これは、特定技法に対する好悪や、上記①ともかかわるため、収集した各書画論における好尚を確認した。

③ 鑑賞・出版活動との関係。書画理論を創出する際には、ある程度の鑑賞・収蔵が必要である。また、自身の蔵品や書画観を披歴する際には、法帖等出版物が刊行されたりもした。これに伴い、書画人の間に軋轢が生じた可能性もあるため、これらが理論に及ぼした影響の有無について考察を行った。

４．研究成果

(1) 董其昌書論の変遷とその要因

まず、主な考察対象である董其昌の書論資料について、その信頼性の検討を行い、近年刊行された董書の影印資料中に偽跡があることを指摘した。これらは、主に『容台別集』『画禅室随筆』などの刊本を基に制作されたものと見られ、理論の検討の際には、慎重にこれを取り除かねばならない。既に鑑定方法については様々な視点・方法が提示されているが（葉子『中国書画鑑定叢論』〔浙江古籍出版社、2009〕など）、書風検討の際には特に連綿の変化に注目すべきであろうと述べた。

次に、顔真卿（709-785）書法に対する評価の変遷とその契機を探った。董は顔書を称賛し、また多く臨書・倣書を残しているが、いつ、どの書跡を重視したかは不明であった。董の有紀年記述を時系列に従って確認した結果、51 歳時に「蔡明遠帖」等顔書５帖以上を収める『鼎帖』を入手したことを契機に、顔を称賛するようになったと推測した。52 歳時に顔書「大唐中興頌」の摩崖を訪れようとしたことも、その推定の根拠となりうる。また、58 歳前後より顔書に注目しなくなったと見られ、その背景には、楊凝式（873-954）書跡への着目があったと推測した。なお、李日華『味水軒日記』巻４に採録される董其昌 57 歳時の款記については、主張が他と大きく異なり、真偽の検討を要することを指摘した。

続いて、「晋人の書は韻を取り、唐人の書は法を取り、宋人の書は意を取る」より始まる董其昌の「書の時代性説」にも注目し、従来解釈の再検討、並びに本説成立の背景の考察を行った。先行研究では、ほとんどが宋人書法の「意」（自身の意図・意志）を称賛し、唐人の「法」（法則性の遵守）を貶斥したものと解釈する。しかし、本説の出典と見られる上掲『味水軒日記』所収款記を、書誌的検討を経て考察したところ、他条では、書法の法則性を指し、かつ人品にも関わる「法」を重視しており、これを有した唐人を称賛していたことが確認できた。董以前に活躍した湯煥の書論『書指』等にも類似の説が窺えることから、これは当時の文学・書法理論における一般的な見解であり、かような論を承けて本説が述べられたと考えられる。また、本説提唱の３ヶ月前に王肯堂が『鬱岡斎墨妙』を刊行しており、収録書跡への言及もないことから、対抗意識もあったと見られる。

なお、以上の検討結果の妥当性を確かめるべく、董其昌の鑑蔵状況・理論変遷と、彼の書風の変遷とを対照しつつその影響関係についても考察した。董の書風は概ね４期に区分され、その画期は彼の『鼎帖』顔真卿帖収蔵期間や、「書の時代性説」提唱時期などと概ね一致することを確認した。

以上のように董其昌書論の変遷を考察したところ、彼が理想とする古法に適った僅かな歴代書跡が、その入手や他人の業績への対抗意識により大きく取り上げられ、自身の理論・実作に反映されるという過程を辿ったと推測された。

(2) 董書論以外の資料に見える特質

董其昌以前に活躍した豊坊（1494-1569 または 70）の「筆訣」に着目した。これは現在、観峰館（滋賀県東近江市）に所蔵されている法帖で、豊の自筆論書が刻されたものである。王世貞（1526-90）の記録以降、日中においてその存在が確認されていない稀覯資料と見られるため、研究協力者・六人部克典氏と共に翻刻、解題の執筆を行った。「筆訣」は、刊本・自筆本として現在伝わる豊の書論『筆訣』、『書訣』、肉筆本「筆訣」（国立故宮博物院蔵）より早くに記された書論であることが判明し、諸本と比較した結果、豊は次第に初学段階を意識して論を展開していったことが確認できた。隷書から楷書への緩やかな接続を説く記述が見られ、かような独特の書体観を抱いていたことも注目される。

また、董其昌在世時に出現したと見られる、出自不明の米芾書跡についても検討し、董の理論形成への影響を考察した。彼は米書「蜀素帖」に数度跋していることから、従来は米芾を称賛したと考えられていた。しかし、その米芾評価は変化しており、概ね 50 歳前後で貶斥に転じたと考えられる。董は「蜀素帖」などといった、筆の制御の利いた書法を評価していなかったと思われる。また当時、うねる細線で書かれた出自不明の米書「西園雅集図記」ほか数点が現れており、彼の知見・好尚はこれらによりもたらされたものと推測される。なお、出自不明の米書に似た書法は、より確かな宋代の資料にもわずかながら確認できる点、付言した。

以上のように、明末においては現在注目されることの少ない米芾「西園雅集図記」のような書風が尊重され、また、隷・楷二体にゆるやかな接続を見るという独特の書体観があったことが確認された。

(3) まとめと、海外での成果公開

以上の見解を総合すると、これら明末の書法理論は、隷書の波発のようなうねる筆線を伴う書風を理想とするものと考えられ、少なくとも清初以降に見られない特徴的な書法観があったといえる。その書法の称賛・希求に際し、古法からの脱去を目指す学書法や、隷書との関連を説くなど、やや統合的志向を帯びた独自の説明がなされていた。これは、当該期の理論の特質であったといえよう。

なお、本研究の成果は、董其昌の書法理論の検討結果を中心に、台湾・国立故宮博物院の展覧会図録『妙合神離―董其昌書画特展』（後掲）においても発表した。

今後の課題としては、今回多くは取り上げられなかった絵画理論の更なる検討、及び清初以降の理論との接続（特に書風区分論）が挙げられる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）
①尾川明穂・六人部克典、観峰館蔵豊坊筆《筆訣》について、観峰館紀要、査読無、第 9 号、2013、pp.4-42
②尾川明穂、董其昌「書の時代性」説成立の背景―唐人書に存する「法」の称揚に着目して―、書論、査読無、第 40 号、2014、pp.92-104
③尾川明穂、董其昌における顔真卿書法評価の変転とその契機、国語国文論集、査読有、第 44 号、pp.2815-2827

〔学会発表〕（計４件）
①尾川明穂、董其昌書論に着目してきて、書学書道史学会第９回学生・若手の会員による研究発表会、2013 年６月 23 日、大阪教育大学天王寺キャンパス（大阪府大阪市）
②尾川明穂、董其昌「書の時代性説」成立の背景―唐人書に存する「法」の称揚に着目して―、平成 26 年度中国文化学会大会、2014 年６月 28 日、北海道教育大学札幌校（北海道札幌市）
③尾川明穂、董其昌の鑑蔵が論書・書作に及ぼした影響について、平成 26 年度安田女子大学日本文学会研究発表会、2015 年２月 14 日、安田女子大学（広島県広島市）
④尾川明穂、明末に生まれた米芾書法―董其昌の米芾書法観形成の要因について、平成 27 年度中国地区全国大学書道学会、2015 年 12 月 12 日、ＲＣＣ文化センター（広島県広島市）

〔図書〕（計１件）
①尾川明穂ほか、国立故宮博物院、妙合神離―董其昌書画特展（董其昌的書論―理論創出背後之原動力的検討）、2016、399（350-363）

６．研究組織
(1) 研究代表者
尾川明穂（OGAWA, Akiho）
安田女子大学・文学部・助教
研究者番号：20630908